

## ワーズワス（作）『マイケル—田園詩』（1800）

—マイケル老人の悲劇—

黒 岩 忠 義

(1994年10月17日 受理)

Wordsworth: "Michael, a Pastoral Poem"

— Old Michael's Tragedy —

Tadayoshi KUROIWA

## は じ め に

『マイケル—田園詩』（*Michael, a Pastoral Poem*）\* は *Lyrical Ballads*（1800）第2巻の最後に37番目の詩として掲載されている。もし Coleridge の *Christabel* が予定通り書き進められて完成していたならば、*Michael* がこのような形で *Lyrical Ballads*（1800）に載ることはなかったであろう。1800年十月第一週までには Wordsworth は *Lyrical Ballads* 第二巻の草稿を第一巻に印刷する筈の「序文」と一緒に印刷屋に既に送付していた。<sup>(1)</sup> そして Coleridge が残りを完成するのを待ちながら、Wordsworth は第二巻に載せるはずの詩の評論に着手しはじめた。十月四日夕、Coleridge が突然、Keswick の自宅を出て徒歩で Grasmere に来て *Christabel, Part 11* の始めの部分を朗読している。Wordsworth は翌朝、再度、同詩の朗読をはやる気持ちを抑えて聴くや、その *Christabel* の批評の一節を序文の終わりの部分に挿入すべく書き、その夜、Dorothy が印刷屋宛てに投函している。しかし、二日後の十月六日には Wordsworth と Coleridge の両者は急遽 *Christabel* を *Lyrical Ballads* から排除することを決めている。<sup>(2)</sup> その理由は両者の文体の違いにあったことが Longman 宛ての手紙<sup>(3)</sup>から推測されるが、もう一つの理由は Coleridge の詩的想像力が創作の重荷に消失していたことにある。

このようにして、Wordsworth は既に印刷中の *Lyrical Ballads* を補う必要に迫られて、かなり大部からなる詩を作る必要があった。そのためには、頭の中で既に醸成されつつあった筈の長い（因みに、*Michael* は491行からなる）、しかも重要な詩に着手したのであった。Dorothy の日記によれば、題目はまだ決まっていなかったけれども、それは明らかに、「不均等に分けられて殆んど heart 状に作られた」（'built nearly in the form of a heart unequally divided'）「羊囲い」<sup>(4)</sup> と関連して、やがて *Michael, a Pastoral Poem* の詩へと発展してゆくのである。Wordsworth 兄妹は

十月十一日 Green-head 溪谷の探索に出かけ、そのとき、くだんの羊囲い (the Sheep-fold) の跡を発見したのである。そして翌十二日に書き始められ、次の二ヶ月間は断続的にその羊囲いの詩に執心し、十二月九日にはその詩は書き終えられている。<sup>5)</sup> そしてその年のクリスマスまでにはその491行の詩は一部は Coleridge の手伝いもあって、清書をすませ Bristol に送付されたのである。<sup>6)</sup> そして五週間後には、*Lyrical Ballads* 第二版の *Christabel* が納まるべき位置、つまり最後のページに *Michael, a Pastoral Poem* の題目で出版されることになる。

Michael の物語はその重要な主題と関連ある二つの初期の資料に基づいている。その一つは Cumberland の山々を居とする老羊飼いの英雄的人物を描写しながらも、自らの人生を語る無韻詩であるが、Stephen Parrish の検証によれば、*Recluse* のために手がけられて Coleridge の1796年詩と Dorothy の日記の空欄に殴り書きにされて残っている。この殴り書きのなかに、Michael とその息子の生涯における一つの出来事が出てくる。つまり、その話は行方不明の一頭の羊を捜す話として *Prelude* VIII (1805), 222-311で Mrs. Matron's Tale として語られている。もう一つの Michael と Luke の話は150年以上もの間 Dove Cottage Notebooks の一つに未発見のまま眠っていた資料のなかに、半ばおどけて書かれた Michael の不運についての六連からなるバラッドである。Parrish はこれらの Dove Cottage の原資料に基づき、Wordsworth がこれらの資料から老人 Michael の悲劇的絶望の中心的出来事と一緒にその羊囲いの中心となるイメージを描いて行ったと推測している。<sup>7)</sup> 要するに、*Michael* はその地方に実際に起こった二つの伝承が合体してつくられたのであった。つまり、都会に出て悪の道に走った Michael の息子 Luke の人物像と状況は Wordsworth 兄妹が住んでいた家の何年も前の住人である家族に由来し、また Michael という人物は七年間も寂しい谷間で羊囲いを作って来た一老人の話に由来したものである。

## 1

この詩の冒頭は先ず読者を、「公道」('the public way') (1)からそれて「秘境」('a hidden valley') (8)の Green-head 溪谷へと至り、せきたてるように騒々しい音をたてて流れる小川沿いに登るようにと誘う描写から始まる。そして切り立った道との「苦闘」を促す。詩人の激励に促されてその峻険な坂道を登ると、そこは田園的な山々がたぎりたつ小川の辺りに、おのずから開けて独自の「秘境」をつくっている。人家はなく、ただ見ることができるのは「二、三頭の羊と岩と石と、それに頭上高く舞う鳶」だけである。なんとも、寂寥そのものである。

If from the public way you turn your steps  
Up the tumultuous brook of Green-head Gill,  
You will suppose that with an upright path  
Your feet must struggle; in such bold ascent

The pastoral Mountains front you, face to face.  
 But, courage! for beside that boisterous Brook  
 The mountains have all open'd out themselves,  
 And made a hidden valley of their own.  
 No habitation there is seen; but such  
 As journey thither find themselves alone  
 With a few sheep, with rocks and stones, and kites  
 That overhead are sailing in the sky. (1-12)

この詩の冒頭部分は勿論、単なる情景描写ではない。いづれ引き倒し、死の寸前にまで追い込む或る「力」に対する人間の無限の「苦闘」が暗示され、当然本詩の主題と深い関わりがある。ここに描かれた「秘境」が本詩の主人公 Michael 老人とその家族一家の居住する世界であり、「二、三頭の羊と岩と石」の描写は、Michael 一家の過酷な生活条件を指すものと思われる。さらに頭上高く舞う鳶の描写はその溪谷に住まう Michael 一家の上に漂う不吉な死の影である。詩人の言葉によれば、'It is in truth an utter solitude' (13) ということになろう。因みに、この頭上高く舞う鳶のイメージは、状況は異なるが、手法の点で奇しくも Graham Greene の *The Power and the Glory*<sup>(8)</sup> の冒頭部のシーンを想起させる。

さて、詩人がそのような「秘境」('a hidden valley') に案内したのは他ならぬ確固たる一つの理由があった。それは、「たとえ見ても気づかないで、通り過ぎるかも知れない一つのもの」('one object which you might pass by, / Might see and notice not') (15-16) に言及するためである。

#### Beside the brook

There is a *stragglng heap of unhewn stones!*  
 And to that place a story appertains,  
 Which, though it be *ungarnished* with events,  
 Is not unfit, I deem, for the fire-side,  
 Or for the summer shade. (Italics mine) (16-21)

小川の傍の「とり散らかされた荒削りの石の塚」に、詩人が語らねばならぬ一つの物語があると言っているのである。その物語とは「事件で彩られた話しではないけれども」('ungarnished with events') (19), 「炉辺で、はたまた、夏の緑陰で語るにふさわしい話」(20-21) であると断るところに Wordsworth の詩人としての性格を見る。つまり、Wordsworth は元来珍奇なるものを避けて、平凡さの中に非凡なるものを発見し、不変の真実をうたう詩人であったからである。Wordsworth が少年時代に好んで聴いた話は、仕事と住居とを谷間にもつ住民、羊飼いの話であったけれども、

それは単に彼らが好きだったからではない。彼らは仕事と居を営む山々や丘と深く関わりがあったからである。書物には無頓着な少年の頃、すでに「自然のもつ威力」(‘the power of Nature’) (28-9) を感じることができるようになっていた Wordsworth は「自然の物象の優しい働き」(‘the gentle agency/Of natural objects’ (29-30) に助けられて、その話の中にまだ自分のものではない感情を感じ、不完全ではあったが、「人間や、人の情、人生」(‘on man; the heart of man and human life’) (33)について考えることができるようになっていた。そしてその話を詩人は「自分が亡くなった後もその山々に住んでいて『自分の後継者』(‘my second self’)になるかも知れない若い詩人たちの歓びのために語ろう」(35-9) と言うとき、また Michael 老人をして「両親達は先祖の墓地に眠ることを厭はなかった。おまえも先祖の人々がしたように生きて欲しいのだ(379-381)」と言わしめるとき、この詩における Wordsworth の主要な関心事の一つは継承性 (Continuity) にあることがわかる。

## 2

*Michael, a Pastoral Poem* は批評家の間では高く評価されてきた人道的な詩の中で最も成功した詩の一つである。Wordsworth はその主旨を Thomas Pool 宛の手紙 (April 9, 1801) の中で次のように書いている。

In the last Poem of my 2nd Volu. I have attempted to give a picture of a man, of strong mind and lively sensibility, agitated by two most powerful affections of the human heart; the parental affection, and the love of property, *landed* property including the feelings of inheritance, home, and personal and family independence.’<sup>(9)</sup>

「最後の詩」とは本詩 *Michael* のことであるが、この詩の中で詩人は人間愛の中でも二つの最も強力な愛情つまり遺産、家庭、個人と家族の自立に対する感情を含む両親の子どもに対する愛と、土地、財産に対する愛によって揺さぶられる強い精神力と活発な感情の持ち主を描こうとしたことがわかる。しかるに、主人公 Michael は Grasmere の森林地帯に住む年老いた牧人ではあったが、強い精神力、手足は強く、体格は若い頃から老齢の今に至るまで人並以上に強健、心は鋭敏で、熱烈、質素で何事にも向き、牧羊の職業に賭けては人並以上に敏捷で用心深い人間として描かれている。

Upon the Forest-side in Grasmere Vale

There dwelt a Shepherd, Michael was his name,

An *old* man, *stout* of heart, and *strong* of limb.

His bodily frame had been from youth to age  
 Of an *unusual strength*; his mind was *keen*  
*Intense and frugal, apt* for all affairs,  
 And in his Shepherd's calling he was *prompt*  
 And *watchful* more than ordinary men. (Italics mine) (40-47)

Michael は齢は八十歳に達していたが、彼には二十も違う見目麗しい、「働き者」(‘a woman of a stirring life’) (83)である妻 Izabel とそれに、可愛い一人息子 Luke と、どんな嵐にも鍛えられた二匹の勇敢な犬がいた。働き者の妻は二台の糸車を持ち、一台が休んでいるときは、もう一台が動いていたと言うのであるから、勤勉な Michael 老人に相応しい妻であったことがわかる。一人息子の Luke は、牧人 Michael にとって立派な跡継ぎを意味するが、牧人達の言葉で言えば「棺桶に片足をつっこんだ年齢」(‘with one foot in the grave’) (92)になってから生まれたので「掛け替えのない宝物」(‘the one of an inestimable worth’) (94)として育てられたのは言うまでもない。日も暮れて戸外の仕事から帰宅するや、一家はこぎっぱりした食卓に向かい粗末な夕食を囲む時をのぞけば、夜なべの仕事の手を休めることはなく、夕食がすむとはやばやと、また Michael は息子の Luke と暖炉の傍らに座り、炉辺で都合の良い仕事に精を出すのである。黄昏が迫ると、きまって Lamp が吊り下げられる。ここからはその谷間一帯を広く見渡せたので、この家自体がいつの間にか人々の間では、「つつましい夫婦が生きた生涯の公の象徴」(‘a public Symbol of the life, /The thrifty Pair had lived’) (137-8) と考えられ、またその証しとして、広く「宵の明星」‘The Evening Star’ と呼ばれるようになる。

また Michael は長年連れ添った妻を愛しただけではない。年老いて生まれた息子にたいする愛情は格別のものであった。要するに、息子と言うものは、もしもの時は生の継承への希望であるが、殊に一人息子 Luke は何にもまして、老い行く Michael に与えられた「希望と将来への期待」(‘hope and forward looking thoughts’) (155) でもあり、また、「自然の成り行きとしてどうしても失敗しなければならないときには、不安のための心の動揺」(‘stirrings of inquietude, when they/By tendency of nature needs must fail’) (156-7) のために、実はこの不安は現実のものとなるのであるが、「尚一層愛しい」(more dear) (150) のである。従って、Michael 老人が「暇つぶしや、楽しみのためだけでなく、忍耐強く、優しい行為に駆り立てられ、しばしば女のするような優しい手つきでゆりかごを動かしたり」(162-8)したのは、この細やかな「愛情の行為」(‘acts of tenderness’) (167) において、彼は自分の生を継承してくれるもうひとつの生を息子 Luke に見ているのである。

Michael 老人は厳しい頑固な心の持ち主でありながらも、外で仕事をするとき、また玄関先の大きな樫の老木、通称「刈り込みの木」‘The CLIPPING TREE’ (179) の下で仕事をするときは、まだ男の身なりもせぬ Luke を目の届くところに置きたがる。そしてそこに横たわる羊に悪さで

もしようものならば「愛情のこもった眼差しでたしなめたり、叱ったりして、心遣いをしたものである」(182-3)と言うとき、年老いた Michael の Luke によせる愛情の程が読みとれる。

There, while they two were sitting in the shade,  
 With others round them, earnest all and blithe,  
*Would Michael exercise his heart with looks  
 Of fond correction and reproof bestowed  
 Upon the Child, if he disturbed the sheep  
 By catching at their legs, or with his shouts  
 Scared them, while they lay still beneath the shears.* (Italics mine) (180-6)

また玄関の前にたつその一本の「樫の老木」は Michael が長い「時」の力と衰退に耐えてきた「忍耐」の象徴であると同時に、また彼の「苦闘」をも意味する。その老木の下で老人は Luke に羊の刈り込みの術を伝授するのである。

五歳になったばかりの Luke に分不相応にも Michael 老人が手づくりの見事な牧羊者の杖 (a perfect shepherd's Staff) (193) を授けるのは、殆んど儀式的な行為に近い。しかし、そうすることによって、老人は生業としての牧人の仕事を息子の Luke に引き渡したのである。十歳になった Luke は今ではもう十分、山の嵐も、高いところに登るのも、長い道のりもものともせず、父親と一緒に毎日、行を共にする「友達のように」('as companions') (208) なるのである。したがって、Michael は「太陽と光」('Light to the sun'), 「風と音楽」('music to the wind') (212) の関係に見られるが如き「感情と流出物」('feelings and emanations') (211) との対応を息子の Luke に感じとり、「老人 Michael の心は生まれ変わった」('the Old Man's heart seemed born again') (213) のである。この様にして、少年 Luke は十八歳になり、父親の「慰めとなり日々の希望」('his comfort and his daily hope') (216) となって行く。

Wordsworth はこのような堅実でほほえましい家族愛と勤勉を描く背景を Charles James Fox (1749-1806) 宛の手紙 (Jan. 14, 1801) の中で明らかにしている。——それによると当時の賃金と生活費との増大する不均衡に加えて、国全体にわたって産業の拡大と重課税が進み、貧民救済施設や工場などが拡大し、貧しい人たちの間における家庭愛の絆は弱まり、また数えきれないほどにまったく破壊されていった。また、両親は子供達から、子供達は両親から隔離され、妻達はもはや自分の手で夫のために食事を用意することもない。夫が家庭に興味を抱くものはなにもなく、また愛するものはそこにはなにも残されていない、と書いている。その一例として詩人は二人の隣人の夫婦を挙げている。それによるとその夫婦は八十の齢を越えた孤独な老人で、夫は何カ月も寝床に臥したまま、その二、三週間は彼の妻以外には世話をしてくれる者とていない。妻も最近、足の不自由のため夫の寝床まで食事を運ぶことができないこともあった。近所の人たちが井戸から水を汲み、

その他のことをして挙げる。しかし彼女の病はひどくなり、早晚二人は他の貧しい人たちと一緒に教会の救済を受ける必要に迫られても、長い間二人で住む家を持っていればそのような手だてを受けるのも難しいのでは、と心配するようになる。そのことを考えると彼女は「胸が張り裂ける思い」であると書いている。<sup>40)</sup> この事実は詩人にとっては、当時自立の精神がまだ英国の幾らかの地域では根強く残っていて、このような人達にはまだ自立的家庭生活の幸せへの崇高な自覚が認められることを意味した。もしこのような精神が急速に消失しつつあるのが真実であるとすれば、国にとってこれ以上の不幸はないと言う社会認識のもとでこの詩が書かれたのであった。

## 3

然るに、勤勉で誠実な Michael 一家は突然、「悲しい知らせ」(‘distressful tidings’) (219) に襲われる。もともと、裕福でかつ勤勉であった甥が思いがけなく不幸に襲われ、彼の保証人となっていた Michael 老人はその債務の弁済を命じられたのである。その額は彼の資産の半分に近い。そこで Michael 老人は「どんな老人も思いもつかないほどの希望」(More hope out of his life than he supposed that any old man ever could have lost) (229-30) を奪われたのである。しかし、老人は勇気を取り戻しその難事に対処すべく、父祖伝来の財産の一部を売ることにする。しかし、考え直してみるや、その勇気は二日後には挫ける。「もしこの土地が他人の手に渡ることにならば、墓の中に無事眠ることはできないと思うのだ。」(240-2)

“Isabel,” said he,  
Two evenings after he had heard the news  
“I have been toiling more than seventy years,  
And in the open sun-shine of God’s love  
Have we all liv’d, yet *if these fields of ours*  
*Should pass into a Stranger’s hand, I think*  
*That I could not lie quiet in my grave.*” (Italics mine) (284-92)

と、彼の心は揺れる。この苦悩の言葉には父祖との強い絆と父祖伝来の遺産への愛着がある。1800年当時 Grasmere 周辺には約200人近くの人々が住み、その中の26人は ‘statesman’ と呼ばれ、自由な土地を分けないうで遺産として保有する小農民達であった。Wordsworth はこの地を牧人達と農民達の完全な共和国とみる傾向があった。しかし、産業都市の成長に伴い織物の家庭産業の衰退は、より貧乏な ‘statesman’ たちをして土地を金持ちに売らせ、その結果不平等は拡大していった。Wordsworth はそれまでは私有財産を否定する William Godwin (1756-1836) の思想を受け入れていたが、やがて私有財産を手放すことによる沈滞の原因を理解するに至る。そこで

